W. Raabe „Stopfkuchen“ 論

―― 語りの仕組みと読者の立場（4）

大　塚　　譲

≪第五章≫　モチーフの問題

Raabe の読者に対する意識には独特のものがある。彼は「『年代記』以来，物語る Ich に支えられ操られた読者の積極的な参加（Mitvollziehen）を，つまり作品の内的な諸連関を嗅ぎ分け理解する読者の能力を期待していた。[1]」これをもう一歩進めて言えば，読み解く能力のある読者しか作品の中に参入できず，それ以外の読者は途中で振い落されうるということであって，H. Helmers も述べているように，これは端的に作家による「読者の選別」（Leserauswahl [2]）と称しうる体のものである。事実，こうした Raabe の対読者意識は，この小説[3] の掲載が予定されていた雑誌の出版社に宛てた彼の書簡からも窺い知ることができる。「しかしこの本は雑誌にも書かれてある通りに印刷してもらわなければなりません。この点は，私にはそこに詰め込んだもののことを考えるとこれまで以上に重要なのです。親愛なる読者諸賢のた

1）Fritz Martini, „Deutsche Literatur im Bürgerlichen Realismus 1848～1898“ (J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, 1964) S. 665。ここで『年代記』とは Reebe の処女作 „Die Chronik der Sperlingsgasse“（『雀横町年代記』）のこと。

2）Hermann Helmers, „Die Figur des Erzahlers bei Raabe“ in: „Raabe in neuer Sicht“ herausgegeben von Hermann Helmers (W. Kohlhammer Verlag, 1968) S. 331。

3）テキストは，Wilhelm Raabe, „Stopfkuchen――eine See――und Mordgeschichte“ in: Wilhelm Raabe・Sämtliche Werke (Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1969) B. 18, S. 7～207。

めを思う部分的変更等には一切応じかねます。[4]」ここに現われているのは，この作品の個々の表現に託した作者 Raabe の強い思い入ればかりではない。後段の「親愛なる読者諸賢云々」の言葉からは，もともと凡百の読者の理解など当てにしてはおらず，一握りの読者にわかってもらうことができればそれでよいのだ，といったきわめて ironisch で一種倨傲とも言える底意が滲み出ているように感じられる。しかも，理解を期待された少数の読者にしても，最後に手に入れるものはといえば，例えば密儀的な感動などとは程遠く，むしろ苦い自己対象化でしかないかもしれない。このことを裏書きするように，Raabe は，この小説を高く評価する書評を発表した E. Sträter 宛の礼状の中で，遠からず予想されるこの小説に対する読書界の反発に触れた後，しかしいずれは「不機嫌ながら賛同する愛好者（verdrießlich-zustimmende Liebhaber）を見出すでしょう[5]」と述べている。確かに，この小説は，前回詳述したように，読者に面白そうな事件への関心を吹き込んでおいて，さんざんじらした挙句に，どこにでもころがっていそうな，およそ作り物としての犯罪らしからぬ，事故に等しいつまらぬ事件を差し出して，故意に期待を挫くことで読者を試しているかに見える。これは，言うなれば読者に対する≪俗物性テスト≫といった趣のもので，読者は，今舐めさせられた Desillusion が意図的な罠であることに気付き，これを仕掛けた作家の本来の意図がどこにあるかを考察するように求められていると考えられる。今回は，作家の仕掛けた罠の仕組みに探りを入れた前回[6]の後を受けて，この作品の隠された本来の意図について検討を加えてみたい。この作業は，本稿に残された最後の課題でもある。

この小説において，一旦の Desillusion の後に，読者が読み解くべき隠

---

4) Wilhelm Raabe・Sämtliche Werke B.18, Anhang S.428。しかし Raabe は，この出版社 Die Union, Deutsche Varlagsgesellschaft, Stuttgart から原稿を返送され掲載を断わられている。

5) A. a. O. B.18 Anhang S. 431～432.
実際にこの本の売れ行きは芳しいものではなく，Raabe のG. Klee 宛の手紙（1905年6月15日付）によると，版を重ねるのに15年もかかっている．（a. a. O. S. 427)。

6) 小樽商科大学『人文研究』第68輯（1984年8月）43～69頁。

蔽された究極的な意味とは，先走りして端的に言えば，広義における „Philistertum“[7] 批判ということになるであろう。M.Adler によれば，Raabe は自分の作品の中で最も優れたものとして躊躇なく „Stopfkuchen“ の名を挙げ，「あそこでは，私は人道的な下司ども（die menschliche Kanaille）をがっちりと摑えて離さなかったんですよ！[8]」と述べたという。Braunschweig 版 Raabe 全集の編纂者 K.Hoppe はこれに注釈を加えて，この発言の根拠は，Raabe が作品の中で身に覚えのない濡れ衣を着せられた「農夫 Quakatz を例にとって，勝手な思い込みから隣人を排撃して憚らない近隣の連中を弾該した手法[9]」にあるとしているが，この解釈は，遺憾ながら狭義の „Philistertum“ 批判にしか留意していないように思われる。この小説のもうひとつの，時代批判にかかわるより重要なモチーフが，Stopfkuchen による成功者 Eduard の Philistertum への攻撃にあることを考えれば，またこの小説が，読者を故意に罠に陥れて試し選別している点をも考慮に入れるならば，この „Kanaille“ には，同時に Eduard に象徴される時代にうまく適応して生き成功した者たちの Philistertum や読者の Philistertum，総じて同時代の Philistertum 一般が含意されていると考えた方が，気難しい Ironiker である Raabe にはより適応しいのではあるまいか。

---

7) Philister とは，もともと聖書に登場するペリシテ人（前12世紀頃パレスチナ沿岸に侵入）のことで，ドイツでは17世紀以来主に学生用語として使用されてきており，古くは学生以外の者一般を指し，やがて学生下宿の主やかつて学生であった者の意味で用いられ，さらには Goethe 以来小市民的な視野の偏狭な人物＝俗物という軽蔑的な意味となり，Nietzsche に至ると „Bildungsphilister“（「教養ある俗物」）という形で逆に大学や学問に矛先が向けられることになる。尚，Philister の語義の変遷については，Moriz Heyne 編 Deutsches Wörterbuch（1905）の記述が詳細かつ適切である。

8) A. a. O. B.18 Auhang S.427。
ここでは Kanaille を集合名詞と解釈した。

9) A. a. O.

(一) 狭義の „Philistertum“ 批判

1.

読者が読み解くべきこの小説に隠蔽された意味のうち，我々は最初に狭義の „Philistertum“ 批判について検討を加えてみよう。この問題は，後に取り上げる広義の „Philistertum“ 批判ほどはなはだしく隠蔽されてはおらず，むしろかなり明示的なのではあるが，読者が読み解かないかぎりその全容を現わさないという事情に変りはない。ここでは，読者は「Kienbaum 殺害事件」の本質とは何か，という設問の前に立たされているように思われる。そして読者は，この設問に答えることを通して，勤勉・実直な市民というものがいかに罪深い存在になりうるか，彼らが勤勉・実直というマスクの裏側にいかに無恥無定見で浮薄な正体を隠しているかを見届けることを要請されているように思われる。

ここで対象となる市民とは，赤の砦（7年戦争当時の城址で，現在そこに住んでいる富裕な農家の通称。以前の主は Kienbaum事件の容疑者となった Quakatz であったが，今は Stopfkuchen と Tinchen の代に変っている。）周辺の町と村に住む住民たちのことである。彼らは，Kienbaum 殺害事件をめぐって，浅墓な先入見に基づいて Quakatz に真犯人の烙印を押し，娘の Tinchen をも巻き添えにして長年にわたって迫害し続けるが，最後には Stopfkuchen による事件の意外な真相の暴露によって批判される，というよりはむしろ完膚無きまでに愚弄される。この Stopfkuchen による Philister 愚弄作戦は，Kienbaum殺害事件の本質についての彼の認識と，この認識に基づく事件の最終的な処理の仕方とから成っている。しかし，読者がこの Stopfkuchen の作戦の全貌を把握できるのは，もちろん，作家による意図的な視点誘導の軛を脱した後，つまり Eduard が実は終始 Ich-Erzähler ではなく単に登場人物にすぎないことを知り，この人物の不明な視点に一定の距離を置き始めた後のことであって，そうした目で改めてそれ以前の部分を含めた作品の全体を点検してみると，ironish でごく暗示的な表現の

形で，Kienbaum 殺害事件についての Stopfkuchen の意味深長な言葉がそこここにちりばめられているのがわかってくる。

前回にも述べたように[10]，いわゆる Kienbaum 殺害事件の真相は，作品全体のほぼ $\frac{4}{5}$ を経過した S. 165以降の，金腕亭での Stopfkuchen による長大な談話，とりわけ S. 185から S. 193にかけての Störzer による長い独白（もちろんこれも Stofkuchen が Störzer の独白を直接引用したもの）において初めて明らかになる。しかもその真相たるや，実につまらぬ事故に等しい偶発事であって，まるで玉葱の皮を一枚一枚せっせと骨折って剝いてゆくと，一番奥からいじけて腐った芯が出てきたような具合である。実は，本質的な意味に関わるものは，読者が面白い事件の真相が知りたい一心で放り棄ててきた玉葱の皮に隠されていた。Kienbaum 事件の本質についての Stopfkuchen の認識に関しても事情は全く同じである。それはすでに赤の砦上での彼の談話の中に目立ない形で嵌め込まれていた。彼は，S. 121で Kienbaum 事件の容疑に苦しむあまり酒浸りになり娘の Tinchen にもつらく当る Quakatz の荒んだ様子を批判的に，しかし例によって晦渋な言い回しで物語った後，そっと要約風に「おれが当時すでに Quakatz 対 Kienbaum の事件（den Fall Kienbaum gegen Quakatz）をどんなにませた目で眺めていたかをとっくりと考えてみると……」と述べている。ここで留意すべきは，彼が今物語っているのは赤の砦の惨状についてであって，いわゆる Kienbaum 事件そのものについては全く触れていないにもかかわらず，赤の砦の惨状と Kienbaum 事件とが等置されているという点である。このことから次のことを推察することができる。すなわち，Stopfkuchen にとって，Kienbaum 事件の真犯人が誰かということよりもむしろ，無実の Quakatz が容疑者に仕立て上げられたことから生来した赤の砦の惨状という事実こそが許しがたい問題であり，事件と呼ぶに値するのはまさにこの事実なのだ，ということである。そしてこれこそまさに，彼の事件の本質についての認識に他ならないのである。そもそも，この小説全体が「犯人は誰か？」式の発想に対する揶揄の趣を呈し

10) 前掲書　46頁，63〜69頁。

ているとも言えるが，ここでも読者向けにそうした発想に対するアンチ・テーゼがこっそりと謎掛けに近い形で挾み込まれていると考えてよいだろう。

同様の Stopfkuchen の認識は，S.138のやはり片隅の表現の中にも挾み込まれている。ここで彼は，大学を中退して故郷の町に舞い戻った後，ある夜偶然のきっかけで訪れることになった赤の砦の当時の惨状について物語っている。卒中の発作に見舞われた老 Quakatz はすでに廃人同然で，22歳の娘 Tinchen が代って赤の砦を取り仕切ってはいるが，近隣の屑ばかりを集めた下男下女を十分に掌握することができない。そのひどい嵐の夜も，使用人たちは彼女の反対を押し切ってダンスパーティーに出掛け，夜が更けてから上機嫌で帰ってくると彼女にひどい悪態を並べる。そこへ物陰から一部始終を観察していた Stopfkuchen が登場して使用人たちを一喝する。呑気で普段はまるで物に動じない彼も，この時ばかりは恐しい形相になって目を剝いて（Augen machen)[11]彼らを睨み付けた。「『目が皿になった』とあの当時ある詩人が歌っているが，その詩人はもちろん，おれが……赤の砦と Tinchen Quakatz と親爺の Quakatz を下男下女や Kienbaum 共々，早い話が殺人物語（Mordgeschichte）全体を手に入れた時のおれの目をご存じなかったのさ」。ここで「赤の砦と Tinchen Quakatz と親爺の Quakatz を下男下女や Kienbaum 共々」とは，Kienbaum 殺害事件の嫌疑に悩まされ Kienbaum の亡霊につきまとわれていた当時の赤の砦の惨状全体のことであり，従ってこの惨状全体と「殺人物語」とが等置されていることになる。「殺人物語」とは Kienbaum 事件のお道化た表現であるはずだから，ここでもやはり先の箇所同様に，事件をいわゆる事実関係としてではなしに，世間の嫌疑と迫害によってもたらされた赤の砦の惨状として把えるという Stopfkuchen の根本認識が暗示されているのがわかる。むしろ „Mordfall“（「殺人事件」）ではなく，„Mordgeschichte“（「殺人物語」。Geschichte＝物語，作り話，でっち上げ）と表現されている分だけ，Kienbaum 事件のでっち上げられた側面が ironisch

11）„Augen machen“ と言えば通常は「驚きの目を見張る」意だが，ここでは「怒りのために目を剝く」としか取りようがないように思われる。

に，より鮮明に浮かび上がってくると言えるかもしれない。

Kienbaum 殺害事件の本質が，いわゆる事件の事実関係にではなく，赤の砦の惨状にあるとすれば，当然被害者は Quakatz と Tinchen であり，また真犯人は世間，すなわち，地上的正義[12]に名を借りて人を裁きつつ，その実自らの物見高い好奇心の満足を求めているにすぎない世間である，ということになる。こうした認識を更にもっと包括的に定式化していると考えられる暗示的な表現が，小説の結末に近い部分に見出される。そもそも Stopfkuchen と別れた後の Ednard は，この日友人が晦渋かつ奇妙きてれつな表現で物語ったことをひとつひとつ思い浮かべ，仔細に吟味し，Stopfkuchen 風の暗示的なレトリックで要約を試み，そのことを通して自らの人生を総点検している気配だが，そんなある要約の中に「人間 対 Störzer-Kienbaum の一件」[13]（die Sache Störzer-Kienbaum gegen die Menschheit）という奇妙な表現が見られる。ここには二つの「事件」が対置されている。前半の部分が，Störzer（真犯人）対 Kienbaum（被害者）という本来のいわゆる Kienbaum 殺害事件を指していることは明らかだろう。では，それに対置される die Menschheit とは何か。ここで思い起こされるのは，赤い砦上での Stopfkuchen の談話の中に，赤の砦の父娘を爪弾きにする世間を目して，再三にわたって，ironische Umkehrung 風に die Menschheit と呼んでいる表現が見られたことである[14]。ここでの die Menschhei もそれらとほぼ同じ意味合いであるはずで，ただ die Rote Schanze（＝Quakatz und Tinchen）gegen die Menschheit と少し補って考えれば足りよう。こうして上の表現は次のように読み解くことができる。

12）原語は irdische Gerechtigkeit で通常は「司直」の意だが，この小説では「Philister たちが準拠する市民道徳」の意味合いで揶揄を込めて用いられることが多いので，あえて直訳調で通した。

13）S. 199。以下，テキストの当該箇所を指示する場合ページ数のみを挙げる。

14）S. 84，S.109等。

<Störzer gegen Kienbarm>

gegen

<die Rote Schanze (=Quakatz und Tinchen) gegen die Menschheit>

本来の Kienbaum 事件に対置される世間 (die Menschheit = die Welt) の引き起こした事件とは，言うまでもなく，赤の砦の父娘に悲惨な過去をもたらしたあの行為，低劣な欲求に促されて，しかし一応は地上的正義を楯に取りながら浅薄な先入見に基づいて赤の砦の父娘を裁き排斥したあの世間の行為に他ならない。それは，Quakatz に真犯人の烙印が押されたままの非業の最期を遂げさせ，その巻き添えになった Tinchen の前半生をもすっかり台無しにした，ある意味では殺人にも悖る犯罪的行為である。Stopfkuchen から見れば，この行為の犯罪性に比べれば，本物の犯罪である Störzer の Kienbaum 殺しなどは，Kienbaum 自身がその粗暴な行為によって自ら招き寄せた Störzer の止むを得ぬ正当防衛にすぎず，ほとんど問題にも値しない[15]。

2.

それでは，このような本質的な認識に基づいて，Stopfkuchen は「事件」をどのように処理したか。換言すれば，彼はどのような手順で Philister を愚弄することにって，その通常は裁かれることなき罪を裁いたか。その手順の第一は，彼が真犯人 Störzer を司直と世間の手に引き渡そうとしなかったことである。真犯人が Störzer であることを自分だけが知ってしまった時，さすがの彼も思案に暮れるが，「誰が実際に Kienbaum を殺したかを即座に知らせねばならない者[16]」は近隣には誰一人いないことがわかったという。彼のこの言葉には実は辛辣きわまる Ironie が隠されており，後の彼の行動が裏書するように，司直にも世間にも全く信を置いていない彼は，ここでその言葉とは裏腹に，真犯人の名をすぐには決っして公表すまいと臍を固めていると考

15) S. 96で「お前さんの話と彼 (=Kienbaum) の話とおれの話のうちでどれがより重要と考えるかについては後で自分で判断するがいいさ。」と彼が Eduard に述べているのも，またS.200では，Eduard が Stopfkuchen 風の考えに立って「私は Kienbaum の霊魂の前を通り過ぎた時にも，ほとんど一片の同情をも覚えず，せいぜいそれが突然立ち現われたことにほんの一瞬驚いただけだった。」と述べているのも，まさに本来の事件などどうでもよいということを意味していよう。

16) S. 180.

えなければならない。同様に「問題の司法による解決が事を左右するかぎり[17]」自分の出る幕ではなかった，と Stopfkuchen が Eduard に述べているのも，単に Eduard を煙に巻くための真赤な嘘であって，Quakatz の不当な逮補と裁判の経験から推して，彼は，地上的正義＝当局を「よりどうでもよいもの，より考慮に値いしないもの[18]」と見なしていたと考えるべきであろう。また世間にしても，Störzer が真犯人であることを知れば，Quakatz と Tinchen の代りに今度は Störzer にその好奇の対象を移して彼を裁き排斥するであろうことも，Stopfkuchen はすでに見通していたはずである[19]。これらの諸点を裏付けていると思われるのは，Störzer を個人的に尋問した際の彼の基本的姿勢が すでにエリーニュスたち（復讐の女神たち）とエウメニスたち（好意ある女神たち）の一体化した立場[20]，「怒りと好意の一体化」[21]した立場に立ったものであったことである。Stopfkuchen は，Störzer が無実の容疑に苦しむ Quakatz と Tinchen を尻目に，自分の罪をひた隠しにしてきたことを許すわけにはいかなかったが，かといって彼を自ら信の置けない当局や世間の手に委ねる気など毛頭なかったであろう。こうして Stopfkuchen は，当局が Störzer をもはや裁くわけにもゆかず，また世間が彼をもはや好奇の対象として弄ぶわけにもゆかなくなった時点で，つまりは彼の死後に，事件の真相を公表することにしたと考えられる。

事件の処理の仕方について Stopfkuchen が第二に考慮した点は，真相公表の「形を……選択すること[22]」，つまり彼の意図を達成するにはいつ，どこで

---

17) S. 167.

18) S. 197.

19) S. 199 でEduard は，騒々しい宿の主人の様子を見て真犯人発見後の Stopfkuchen の立場がよくわかった，という意味のことを述べているが，それはとりわけ Stopfkuchen のこうした洞察がよくわかったという意味であろう。

20) 21) S. 183.

エリーニュスたちとは「一般に殺人，その他自然の法に反する行為に対する復讐あるいは罪の追及の女神」であり，エウメニスたちとは，前者の同じ女神が別の場合に「大地との関係から多産豊穣をもたらすものとして……好意ある女神」と呼ばれる際の呼び名である。高津春繁著『ギリシャ・ローマ神話辞典』（岩波書店 1972年）72頁参照。

22) S. 167.

公表するのがいちばん効果的か，ということであった。彼は Störzer の死後二日目に町の酒場「金腕亭」でそこの女給 Meta と Eduard に事件の真相を物語っている。女給 Meta はさしずめ真相を近隣の Philister たちに触れ回る先触れ役であり，また真犯人 Störzer を人生の恩人としアフリカで功なり名遂げた Eduard には，この意外な真相を，目前に迫った第二の故郷アフリカへの帰還の旅へのいわば意地悪な手向として進呈しようという寸法で，Stopfkuchen はこうして一石二鳥の愚弄戦術に出たわけである[23]。

ここでテキストに即して，Stopfkuchen が Störzer の死後にあえて事件の真相を公表した意図を探ってみると，その第一は「血を清め，Kienbaum の霊魂に満足を与え，またこちらとしてもエリーニュス（復讐の女神たち）にいい加減にドアを後手に閉めて赤の砦をそっとしておいていただく[24]」こと，つまり赤の砦と事件とのつながりを最終的に絶ち切り，そこを今まで以上に静かで快適な場所にすることであった。しかしもちろんそれだけではなかった。その意図の第二は，近隣の Philister どもに，愚弄という鉄槌を下すことにあった。H.Ohl も述べているように「Schaumann（Stopfkuchen の本名—筆者）は，こと世間（die Gesellschaft）に関しては，彼についてのこれまでの解釈が考えているよりもはるかに平然としてはおらず，受身的に待ち通す姿勢でもな[25]」く，むしろそのポーズとは裏腹にきわめて攻撃的で好戦的な意図を秘めていた，と考えざるをえない節がある。例えば，彼が Eduard と町に出掛ける際に，自分をアキレウスとの決死の一騎討に赴くヘクトールに，Tinchen をその妻アンドロマケーに喩えているのは[26]，単なるお道

23) S. 182 で Stopfkuchen が，Tinchen には，彼女にも人伝に耳に入ってから注釈してやる，と言っており，また結末で彼女の心静かな様子が暗示されてもいるように，彼は彼女に，事件の本質を冷静に見極め，彼女の過去を台無しにした Philister たちの正体を自分の目で見届けることを求めていると考えられる。

24) S. 155.

25) Hubert Ohl, „Eduards Heimkehr oder Le Vaillant und das Riesenfaultier. Zu Wilhelm Raabes≫Stopfkuchen≪“1964. in: „Raabe in neuer Sicht“ S.263.

26) S. 154.
この Raabe の比喩は Schiller の詩 „Hektors Abschied“ に基づいており，

化ではなく，まさに彼の真意が「Philister に対して戦を挑むこと[27]」にあることを暗示していると考えないかぎり前後の整合性が成り立たないであろう。しかしもちろん，Stopfkuchen は，アカイア（ギリシャ）の勇士アキレウスの前に敢え無い最期を遂げたトロイアの勇士ヘクトールとは事変り無事生還するのではあるが。ところで Stopfkuchen がヘクトールに喩えられているのは，Philister との対決に臨む彼の強い決意を暗示していることを別とすれば，むしろ Philister たちをアキレウスに擬えることに主たる力点があるように思われる。だがここに登場するのは，自らの錯覚にも気付かぬ無恥で無定見なアキレウスではある。しかしそのようなはしたないアキレウスの姿を見届けることにこそ，まさに Stopfkuchen の攻撃的 Ironie の狙いはあった。すなわち，彼は「下（近隣を指す—筆者）に住むピカピカの鎧甲に身を固めたアカイア人（＝アキレウス）が，ついにパトロクロスの霊の名誉と仇討のために，太った Shaumann（を追いかけて彼—筆者補足）に自分の城の塁壁の回りをトロットかギャロップで駆け回らせることに成功した[28]」Philister たちの図を一目この目で見たかったのである。この捻った比喩表現には，Stopfkuchen の Philister の正体についての辛辣きわまる洞察と，そのような正体を暴き出し愚弄してやろうという彼の決意が含意されている。Philister たちが Stopfkuchen を追い回すとあるのは，彼が彼らに長い年月にわたって真犯人を伏せてきたことへの非難と，むしろそれ以上に事件の意外な真相の顚末をもっと詳しく知りたいという彼らの強い好奇心とを暗示しているであろう。そして「パトロクロスの名誉と仇討のため」とは，彼らが事件の詳しい顚末を知ろうと彼に接近する際に言い立てると予想される口実を暗示している。「パトロクロス」とはもちろん Kienbaum を指しているわけではない。Kienbanm はも

ホメーロスの『イーリアス』そのものにはこの話はない。Schiller の詩については，Friedrich Schiller・Sämtliche Werke in 5 Bänden（Winkler Verlag München, 1981）B. 3, S. 18-19, ホメーロスの『イーリアス』については，ホメーロス『オデュッセイア・イーリアス』（高津春繁・呉茂一訳，筑摩書房版世界文学大系1，1961年 423〜433頁）参照

27) H. Ohl, a. a. O. S. 261.

28) S. 154-155.

ともと名誉など問題になるような人物でもないし，また Philister たちが彼の名誉など言い立てても Stopfkuchen に接近する口実にはなりえない。この「パトロクロス」を Quakatz と解する時にはじめて，Philister の正体を炙り出そうとするこの比喩表現の真の狙いが理解される。つまり，Philister たちは，その好奇心を満足させるためには，無恥・無定見にも，自分たちが排斥し続けた Quakatz の名誉回復の正当性をぬけぬけと言い立てながら押し寄せてくるであろう，と Stopfkuchen は見抜いているのである。以上の解釈をやや敷衡しながらまとめてみれば次のようになろう。Kienbaum 殺害事件の真相を伝え聞いた近隣の Philister たちは　好奇心を刺激する意外な真相の詳細が知りたい一心で，これまで赤の砦を爪弾きにしてきたことも，Quakatz をその死後も真犯人と決め付けてきたこともきれいに忘れて，自分の身代りになって死んだパトロクロスの仇を討つためにヘクトールに一騎討を挑んだアキレウス気取りで，いわば Störzer の身代りになって死んだ Quakatz の名誉回復の正当性をぬけぬけと言い立てながら，またこれとは逆に，まるで掌を返したように，これまでは「勤勉さ」の鑑として賞讃を惜しまなかった Storzer の非を鳴しながら，真相を伏せてきた Stopfkuchen のところへ押し寄せて来るであろう。あらまし以上のように Stopfkuchen は洞察し，またそうした事態の出来そのものを狙ってもいたと考えられる。そしてまさにこのような無恥と無定見と見境の無さにおいて，Philister たちはその正体を，すなわち彼らが欲するのは，その対象が何であれ，また自らの立場の一貫性などまるでおかまいなしに，「天にも昇る恍忽[29]」「楽しみ[30]」「喜び[31]」「満足[32]」を与えてくれるような目新しく刺激的な好奇の対象なのだ，という正体を暴露するであろう。しかもこのたびは，真犯人がすでにこの世にはいないので，これまではなけなしのエレガンスをかろうじて保証してくれていた地上的正義というお得手の衣装に身を隠すわけにもゆかず，あわてて把んだ永遠の正義という手垢に塗れ綻びだらけの古衣にすっかり手を通すのもそこそこに，彼らは思いも掛けぬ刺激的な事件の真相に有頂点になって，低劣な

29) 30) 31) 32) S. 157.

好奇心というその本性も露わにはしゃぎ回り浮かれ騒ぐであろう。

この Stopfkuchen の作戦は美事図に当り，その翌日には早くも近隣の町と村は Kienbaum 殺害事件の意外な真相のことで持ち切りとなった気配である。気配であると言うのは，作者 Raabe が，沸き返る近隣の二，三の様子をごく暗示的に点描するに留め，後は余韻の広がりに委ねているからなのだが，我々はここでそうした二，三の象徴的な現われに即してそこに露呈した Philister たちの正体を見届けてみたい。事件の真相への Philister たちに典型的な反応の第一は，金腕亭の酒場女 Meta のそれである。Philister たちの守護神は，Stopfkuchen が暗示しているように，Fama（噂，風評の女神）[33]であるらしく，彼によって密かに事件の真相の先触れ役をあてがわれたこの Meta は，さしずめこの女神の侍女といったところであろうが，この女は自分の口を指して彼が Maul や Schnabel という露骨に Philister を揶揄し挑発する言葉を呼んでいる[34]ことなどまるで気にも止めずに，意想外な話を聞き終えるやいなや，彼に一言許可を求めた上で，その Schnabel と Maul を存分に働かせて話をたちまちのうちに触れ回る勢いである。因みに，Schnabel[35]（「嘴」）は18世紀以来，Maul[36]（「動物の口」）は15世紀以来，主として人間の口さがないお行儀の悪さを指す言葉として使用されている。

Philister の騒々しい反応の第二の例は，Eduard が投宿しているホテルの主人のそれに見て取ることができる。翌朝早く起き抜けの Eduard の部屋へひどく興奮の体でやって来たこの男は，Kienbaum 事件に「心を痛めながら関心を寄せて[37]」（so schwer und interessiert）きたと口では言いながら，

33) 前掲『ギリシャ・ローマ辞典』には「≪うわさ≫≪世論≫の擬人化された女神。……彼女は無数の耳目を有し，すみやかに飛び行く。オウィディウスは彼女が天・地・海の境に，世界の中心に青銅の，無数の開きのある，反響する宮に，軽信，過誤，ぬか喜び，恐怖，煽動などともに，住んでいるものと，まったくのアレゴリーによって描いている。」（215頁）とある。

34) S. 182.

35) Heinz Küpper, „Illustriertes Lexikon der Deutschen Umgangssprache in 8 Bänden“ (Klett Verlag 1984) B. 7 S. 2521.

36) A. a. O. B. 5 S. 1870.

37) S. 199.

真犯人 Störzer が「地上的正義の手から完全に逃れ[38]」たことが心底残念でならない様子である。というのも，Stopfkuchen が Störzer の存命中に真相を公けにしていれば，地上的正義に事寄せながらもう一度センセーショナルな「楽しくて無気味な興奮[39]」を味わうことができ，いわば事件を二度楽しむことができたからである。

Eduard は，町を立ち去るべく駅へ向かう途中でやはり興奮の体の友人に出っくわすが，この男の反応も典型的に Philister のそれであって，ホテルの主人以上にまるで手離しで興奮している。彼は，Stopfkuchen による事件の真相暴露には，他ならぬ自分たち Philister に対する毒が盛られ棘が含まれていることには天から気付いておらず，Stopfkuchen がついに口を開いたのは Eduard が彼を「腹臓のないおしゃべりを楽しむ気分[40]」にしてくれたお陰であると早合点して，Eduard の貴重な貢献を口を極めて誉めそやすのである。またこの男は，刺激的な大ニュースという「この思い掛けないプレゼント（Überraschung）[41]」を与えてくれた Stopfkuchen のことを，多分その昔彼をのらくら者の能無しと見なしていたであろうことなどきれいに忘れて，「奴はすばらしい男じゃないか。昔とちっとも変っていないじゃないか。」[42]と誉め称えることによって，自らの恥知らずな無定見振りを暴露するのである。そしてこの男は，真犯人 Störzer の葬列が通りかかると，今しがたまでアフリカへ帰るという Eduard を引き止めていたことも忘れて，早くもこの新たな刺激に全神経を奪われてしまうが，どうやらこの気の散り易さも Philister の特徴のひとつとして暗示されているらしい。

通りは，真犯人を隠した棺を一目見ようという人たちでごった返していたが，葬列そのものは，Störzer の死んだ息子の嫁とその幼い二人の子供だけから成る見るも哀れなものだった。なぜなら，Störzer が真犯人であったことを知った Philister たちは，昨日までは律気者の彼の死を悼んでいたにもかかわらず，また彼の罪が止むを得ぬ正当防衛に等しいものであったにもかかわ

38) 39) S. 199.
40) 41) 42) S. 202.
43) 44) 45) S. 203.

らず，葬列に連なることを「儀礼上妥当（schicklich）[43]」ではないと判断したからである。彼のこうした判断を，Eduard が「全然不当では[44]」なく，「完全に正し[45]」いと評しているのは，実は nach irdischer Gerechtigkeit（「地上的正義からすると」）という言葉を故意に省いた Stopfkuchen 風のきわめて ironisch な表現であって，社会通念から一歩も踏み出せない Philister たちの偏狭さを苦笑していると考えなければならない。

こうして Stopfkuchen の Philister 愚弄作戦は完了するが，しかし彼も妻 Tinchen も，Philister たちの真剣な反省を期待している兆候は全然見られないものの，これを機会に彼らとの関係を全く絶ってしまうつもりもまたないようである。二人が「昨晩誰がKienbaum を殺したかを知った世間が押し寄せるのを」[46]静かに待っているらしい様子がそのことを暗示している。彼はこれまでにも，赤の砦の Gemütlichkeit[47]（「快適さ」）を保つために，Quakatz が当主だった頃の近隣とのぎくしゃくとしたわだかまりのある敵対的関係を取り除き，突き離した距離を確保することに心を砕いてきた。その格好の例が彼と Tinchen との婚礼で，彼は「Kienbaum とKienbaum の殺害者（Quakatz のこと—筆者）の噂が到達していた範囲[48]」の Philister たちを客として「太っ腹にドイツ的心情をもって（dick-deutsch-gemütlich）[49]」迎え入れて豪勢な御馳走を振る舞い，「周辺に住む敵対する諸部族の腹わたで自分の槍を洗っ[50]」ている，つまりは，身銭を切る必要がないとなれば普段は爪弾きにしているのもそっちのけでのこのこやって来る Philister たちを軽蔑の目で眺めながら，同時に矛を収めることによって必要最小限の関係だけは修復しようとしているのである。そしてこのたびの Kienbaum 殺害事件の真相の公表によって，近隣に対して精神的に圧倒的に優位な地位を獲得した赤の砦の二人は，丁度赤の砦が近隣の地域を高みから睥睨しているのと同様に，近隣の Philister たちに対して遠く距離を隔てた関係，ほとんど無関係に近い関係を確立することができたであろう。

46) S. 205.

47) 後に見るように，これは Stopfkuchen にとって至上の価値をもつものである。

48) 49) 50) S. 143. deutsches Gemüt は，S. 134. でも，やや文脈は異なるものの，同情を撥ね付ける「勇気」「精神の奥深さ」の意味合いで 用いられている。

(二)　広義の „Philistertum“ 批判

——<Stopfkuchen 対 Eduard>モチーフ

1.

Stopfkuchen の近隣の Philister に対する姿勢には，それが一貫した認識と見通しに支えられたそれなりに真剣なものであったにせよ，所詮彼らが愚弄の対象でしかなかったことが示しているように，十分に余裕のある距離感が感じられた。しかし相手が Eduard となると話は全く別で，彼は終始辛辣な態度を崩さず，そこには剝き出しの敵意すら感じられた。このいわば Stopfkuchen による<Eduard 攻撃>は，すでに赤の砦上での彼の談話の中に現われている。Kienbaum 殺害事件の真犯人を知っていると漏らしながらその名を伏せ，相変らず支離滅裂としか思えない訳のわからない話をし続ける彼に対して，こらえ切れなくなった Eduard が苛立ちの叫びを上げると，彼は「わかったかい Eduard，優れた人間というものはこんなふうに何年も何年も静かに待ってからじっと耐え忍んだ嘲笑と冷遇のお返しをするものなんだよ。お前さんがお気に入りの Le Vaillant[51]を道連れに熱いアフリカで象や犀やキリンを追っ駆けたり，その他諸々の無益なやり方で汗を絞っていた間，おれはこれを，こうやって溜飲が下がる日がやって来るのを，この涼しい木陰で待っていたってわけだ。[52]」とうそぶいて，Eduard の人生をまるで「徒労」であったかのごとく決め付けている。また彼は後に詳細な事件の真相を明らかにするに先立って，恩人 Störzer が真犯人であったことを知らされて強いショックを受け，生れ故郷が急激に無気味なものに見え始めている Eduard に向かって，追い撃ちをかけるように，これから話す真相を「懐かしく心地よい故郷のすてきな記念[53]」として進呈しよう，と辛辣で容赦ない言葉を放ち，

51) Eduard は少年時代，友人 Störzer の愛読書である Le Vaillant 著『アフリカ奥地への旅』からの強い影響を受け、それが後にアフリカへ渡るひとつの機縁ともなったが，ここでは Stopfkuchen がこの書物の著者名を利用して Eduard のアフリカに対する安っぽいエキゾチシズムを揶揄している。

52) S. 96.

53) S. 167.

さらには当の真相暴露そのものの中でも「事態がそもそもいかにして出来しえたかということをじっくり腰を据えて考えられる状態に達してみれば，こんなふうに何もかもがいかにも曇りなくきれいさっぱりと，画然かつ整然たる姿を現わしてくれるものなんだよ。おれが言っているのは，お前さんの友達の Störzer が彼お気に入りの Le Vaillant 氏[54]をお伴に付けてカッファー国へ送り込んだお前さんとは無関係だ。Störzer 自身と農夫 Quakatz と彼の Tinchen とそしてほんの少々事のついでにおれのことを言ってるんだ[55]」と，画然も整然もしていない自らの人生の必然性の薄弱さに思い悩み始めているであろう Eduard を揶揄するのを忘れない。そしていよいよ別れ際に至っても，彼は，事件の真相を聞き終えて，以前は平和そのものに見えた故郷の町が今ではすっかり不可解で無気味に映っている Eduard に対して「縁遠くなってしまった古くからのこんなにも愛すべき友人に，古巣をもう一度居心地よく親しみの持てるものにするためとあれば，お気に召すことは何だってするものだよ。[56]」という容赦を知らない別れの言葉を述べて，最後まで Eduard への攻撃の手を緩めようとしないのである。

それでは，この Stopfkuchen の Eduard に対する執拗かつ異常とも言える攻撃の意図は何か。それは，Eduard 自身の Philistertum を思い知らせることによって，Stopfkuchen には鼻持がならない彼の成功者面を打ち砕くことにあったと考えられる。そして事実，Eduard は自らの Philistertum を思い知らされることになるが，その契機は，もちろん，Stopfkuchen による Kienbaum 事件の真相暴露であった。そのことによって彼は，忸怩たる思いとともに，次の二つのことを認めざるをえなかったと考えられる。第一に，彼は自分が Kienbaum 事件について，これまで見下してきた近隣の Philister と何ら選ぶところのない浅薄な先入見に基づいて判断していたこと。第二に（こちらの方が彼にとってはるかに重要な意味を持つと考えられる）彼が決定的な

54）注51）参照。
55）S. 185.
56）S. 196.

影響を受けた Storzer が事件の真犯人であったことを確認することによって，彼自身の人生が，その赫々たる成功に彩られた華々しい外観とは裏腹に，犯人の良心の呵責からの幼稚な逃避手段たるアフリカへの安ぽっいエキゾチシズムに方向づけられた，きわめて必然性の乏しいものであったことである。

しかしながら，Stopfkuchen と Eduard との対置関係は，単に前者の一方的な勝利に終る個別的な性質のものとしてではなしに，むしろそれを通して時代の孕む問題を一個の Ambivalenz として浮き彫りにすることを意図した時代精神上の対峙として把えられるべきであろう。先にも触れたように，Stopfkuchen と別れた後，Eduard は Stopfkuchen 風のレトリックを駆使して，何度も二人の人生の対比的要約を試みているが，とりわけその中のある要約が，二人の対峙に秘められたより一般的な性質を比較的わかり易く暗示しているように思われる。すでに本稿の初回において引用した箇所ではあるが，文脈が全く異なるので繁を厭わず再引用する。「彼ら（Stopfkuchen と Tinchen—筆者）は，垣根の下を一歩も離れずに故郷に踏み留まりながら，ちょっとしたことを体験し，それをすばらしく晴れやかで明るい魂の中で片付けてみせた。人間は，脂肪（Fett）と隠かさ（Ruhe）と静けさ（Stille）とを頼りに，筋肉質で（sehnig）痩せていて（hager）落ち着きのない（fahrig）征服者気質に対して，一歩も後へは引かぬ力をいまだもって失ってはいなかった。Stopfkuchen の異名を取る Heinrich Schaumann は，このことを私にたっぷりと思い知らせてくれたのだ。[57]」初回においても少し触れたように，一見すると二人の人生が相拮抗しているように見えながら，その実 Eduard の劣勢，彼の自らの人生に対する自信の喪失は隠しようもない。それは，一方における Fett; Ruhe; Stille といった Stopfkuchen の人生を暗示する象徴群と，他方における sehnig; hager; fahrig といった Eduard の人生を暗示するそれらとを比較検討すれば直ちに明らかになる。とりわけここでは，二人の人生についての Eduard の認識の転換が，同時に社会通念上の正負の逆転をも意味する点に注目する必要がある。すなわち，Stopfkuchen、

57) S. 204. 尚，(1)での sehnig の訳「筋骨逞しい」を「筋肉質の」と変更。

の肥満（ここでは Fett＝脂肪）は　事件の真相暴露以前には，「当時の我々の中で，一番太って（dick）いて一番怠け者で一番食いしん坊[58]」だった Stopfkuchen，あるいは「太って（dick）いてばかな Heinrich Schaumann」[59]等々の表現が示しているように，常に劣等生で大学も中退した人生の落伍者としての彼の社会的負性，社会的無能を象徴していた。ところがここでは Ruhe や Stille と結び付いて，落ち着いた度量のある精神を暗示する正の象徴に転換している。これとは逆に，大学卒業後船医としてアメリカ航路で働いた後に，南アフリカで事業を興し莫大な産を成した社会的成功者 Eduard の，敏捷性，社会的有能を本来は意味しているはずの sehnig なる形容詞は，ここでは hager や fahring といった否定的ニュアンスの語と結び付くことによって，負の象徴に転落しているのである。だがこれをもう一歩進めて，このような＜Stopfkuchen 対 Eduard＞の優劣・正負の関係を，時代の中に，すなわち，ビスマルクの帝国における「騒々しい勤勉[60]」や「成功[61]」によって特色づけられる「爆発に比較できるような国内的発展が進められた[62]」「産業の進歩[63]」の時代の中に置き入れ，さらには「この落ち着きのない（fahring）注意力散慢な時代[64]」という作者 Raabe 自身の時代認識をも考慮に入れる時，二人の人生の対峙関係は，一挙により一般的な時代精神上の対立構造を備えて浮かび上がってくるように思われる。すなわち，まず二人の人生上の対峙は，＜Fett 対 sehnig＞という対蹠的肉体象徴が暗示しているように，時代の通念か

58) S. 22. 木村・相良『独和辞典』に dick, dumm, faul und gefräßig＝太ってばかでぐうたらで食いしんぼう（役立たずの標本）という記述がある（S. 335）。この記述の出典はついに見付からなかったが，いずれにしろこの表現が無能の典型を指し示す言い回しだとすれば，こうした一種の符牒で特色づけられる Stopfkuchen の存在そのものが社会的劣性一般の象徴と言えるかもしれない。

59) S. 66.

60) 61) Golo Mann, „Deutsche Geschichte des 19. und 20. Jahrhunderts“ (S. Fischer Verlag 1966) S. 475.
上原和夫訳「近代ドイツ史」（みすず書房　1973年）322頁

62) A. a. O. S. 397. 前掲書268頁。

63) A. a. O. S. 461. 前掲書312頁。

64) A. a. O. B. 18 Anhang S. 499.
1892年3月31日付の Paul Heyse 宛の手紙の中の言葉。

らすると<社会的無能 対 社会的有能>，ないしは<時代適応不能 対 時代順応>といった常識的な対立図式に還元されるはずである。しかしながら Eduard が，Stopfkuchen が赤の砦の窮状を救い，さらには真犯人を庇う形で Kienbaum 事件を処理する過程で示したその深い認識に瞠目し，精神のレベルにおける Stopfkuchen の圧倒的優越と自らの貧困とを確認する時，二人の正負・優劣の関係は逆転する。この時 Stopfkuchen は，「反時代的存在」として，「騒々しい勤勉さ」を以って「成功」を求めて狂奔する時代に欠落しているものを象徴し，逆に Eduard は，「落ち着きのない注意力散漫な時代」の申し子として，その「勤勉」と「成功」の皮相性を象徴する。「生き生きしたものを幽霊じみたものを以って絶えず相対化すること[65]」に腐心し，正常なものに異常なもの，歪んだものを嗅ぎ分け，異常なもの，歪んだものに人間的に価値あるものを察知した作家 Raabe は，ここでも，人生の成功者 Eduard に精神の貧困を，人生の落伍者 Stopfkuchen に精神の豊かさ・深さを振り当てている。

しかしこの精神のレベルにおける優劣・正負の逆転は，もともとの社会的レベルにおける優劣・正負をも解消してしまうわけではない。Sopfkuchen の大学中退への無念の思い[66]や，全篇に繰り返し現われる Eduard や友人たちへの異常とも言える執拗な彼の攻撃性こそが，そのドロップアウト的側面と表裏を成す拭い去り難いルサンチマンを，つまりは本来の社会的優劣・正負の厳存を物語っているだろう。従って，社会的に優越している者（Eduard）は精神的に劣っており，精神的に優越している者 (Sopfkuchen) は社会的に劣っているのであって，こうして，二人の人生の対峙関係は，相対的なもの相互の対立，ないしはむしろ，相補って時代精神全体を浮き彫りにする相補的対立として，かえってそのリアリティーを獲得しているように思われる。

この<Stopfkuchen 対 Eduard>モチーフは，成功者 Eduard が，換

65) Georg Lukács, „Deutsche Realisten des 19. Jahrhunderts“ (A. Francke AG. Verlag, Bern 1951) S. 258.
66) S. 131.

言すれば，「騒々しい勤勉」と「成功」に血道を上げる時代が，自らを相対化し自らに欠落しているものに覚醒するところにその究極的な意味があるだろう。彼は，Stopfkuchen による Kienbaum 事件の真相暴露を契機として自らを相対化せざるをえない仕儀に陥り，その日の Stopfkuchen の言動全体をありのままに写し取ることによってこの友人の精神世界を尋ね，この作業を通して自らの人生に欠落していたものを問い質そうとしているかに見える。この，ほとんど評価を狭まぬ再現という要素に加えて，Kienbaum 事件の真相暴露以前においては，Stopfkuchen の奇怪千万な言辞に対して成功者としての優越感に浸る Eduard の不明な受け応えしか対置されていないという事情も手助って，Stopfkuchen の精神世界（および Eduard の若干のそれ）の解明はほぼ全面的に読者に委ねられることになる。この小説には，もともと一種の「一大符牒遊びの書」とも言える性質があり，とりわけここで取り上げるモチーフにかかわる部分は，象徴と観念の隠し絵の観を呈してことさらに読者の行く手を阻む気配である。作者にしてみれば，おそらくは，読者をこの込み入った符牒遊びに付き合わせることが，この小説に仕組んだ読者向けの最後の≪俗物性テスト≫というつもりなのかしれない。

2.

＜Stopfkuchen 対 Eduard＞モチーフの含意するものは，Stopfkuchen の＜liegen＞（「横わっている」）とEduardの＜laufen＞（「走る」）というそれぞれの存在様式の本質を示す象徴に還元して考えることができる。前者の＜liegen＞は，「速さ」を至上価値とする「騒々しい勤勉」の時代から取り残された「遅さ[67]」を，つまりは「落伍[68]」を意味するだろう。この中心的象徴の周りに，Stopfkuchen の時代の趨勢に背いた諸々の負の面を示す象徴が集結している。肉体にかかわる象徴としては＜Fett＞（「脂肪」）や＜dick＞（「太った」）や＜Wanst＞[69]（「太鼓腹」）等々の，「怠慢」と

67）68）S. 66や S. 82等に見られる「Stopfkuchen が友人たちに置き去りをくう」といった意味の表現には，いずれもこうした寓意が秘められていよう。

69）S. 115.

「遅さ」を示す「肥満」にまつわる象徴群。およびやはり「遅さ」と結び付く「弱い足」(<schwach auf den Füßen>)[70]を挙げることができる。また「肥満」と結び付いてとりあえずはやはり「怠慢」を示しているのが,<gefräßig>(「食いしん坊の」)<Butterbrot essen>[71](「バタ付きパンを食べる」)等の「食物」ないしは「食べること」にかかわる象徴群である。このように一身に時代の通念の容認しない負性を帯びた Stopfkuchen が,<unter der Hecke>[72](「垣根の下に」=孤独・孤立の象徴)横わっていたのは当然のことであった。

これに対して Eduard の<laufen>[73]は,もちろん飛躍的な産業の進歩を目指す時代が要請する「速さ」とその結果としての「成功」を象徴していると考えられる。とりわけこの<laufen>には,<mit den anderen>[74]を伴って「他の者たちと一緒に走る」と表現されることがあるのも,Eduard の時代順応的な生き方を暗示していよう。

時代から脱落して<unter der Hecke liegen>する Stopfkuchen と,時代にうまく適応して<mit den anderren laufen>する Eduard のそれぞれに,その生き方に適応しい基本的な志向性が付与されている。Stopfkuchen には,その無移動性に合致した時間志向性が,Eduard には世界狭しと駆け廻る空間志向性が。二つの志向性のそもそもの提示のされ方自体が,両者の図式的対応関係を明示しているように思われる。少年時代 Stopfkuchen に歴史への関心を呼び起したのは Schwartner という男だった。「おれに用事があって,おれが父の家にいないのがわかった者は,老登録官 Schwartner のところでおれを捜しさえすればかなり確実に見つかったものさ。『学校で教わる知識だよ,Heinrich。』と老 Schwartner は言ったものだ。『学校で教わる知

---

70) S. 62.
71) S. 66.
72) S. 83, S. 85, S. 103, S. 108, S. 142, S. 162, S. 181, S. 196, S. 197 等枚挙にいとまがない。Stopfkuchen 以外の人物がこの表現を用いていることもある。
73) 74) S. 66.

識を物にするんだ，中でも歴史をな』[75]」また，少年 Eduard に地理的関心を呼び覚したのは郵便配達夫 Störzer だった。「あの幸福な日々に気の毒な私の今は亡き母は『あの子は一体またどこに引っ掛かっているんだろう？』と口にするのが常だった。その子は Störzer のところに，……彼の地理学に引っ掛かっていた。[76]」「地理学だよ，地理学なんだよ Eduard ！しかもあの Levalljangのような人物なんだよ！[77]」

Stopfkuchen の時間志向性については後にやや詳しく言及することにして，ここでは先ず Eduard の空間志向性に触れておこう。この Eduard の基本的志向性は，最初は彼の敢意の活動性を象徴するが，先に述べたように，後の二人の生き方の正負の逆転に伴って，彼を典型とする支配的な時代精神の「落ち着きのない，注意力散慢な」皮相性の象徴に転落する。とりわけ Eduard の海外雄飛に強い影響を及ぼした Störzer が，アフリカへのエキゾチックな憧れに縋ることによって罪への自責の念から逃れ続け，しかし実際には一歩も逃亡することなく三十一年間同じ道を往復することによって，延べ地球五周分の道のりに相当する果し無く不毛な循環運動を繰り返したという事実は[78]，ひとり Eduard の空間志向性に留まらず，空間志向性一般についての，自己を見失い果てしなく自己から遠のいてゆく不毛な表相性を暗示しているのかもしれない。「速いばかりが能ではない[79]」という Stopfkuchen の辛辣な言葉の重みを噛みしめているであろう Eduard の乗った船が希望峰へと近付くに従って，逆に彼の方向性喪失の思いは絶望の極に達してゆく，という実に皮肉な成り行き[80]は，精神のレベルにおける空間志向性の最終的な敗北を告げているよ

75) S. 71.
76) S. 15.
77) S. 21. ここで Störzer は，フランス語を知らない学問のない人物らしく，Le Vaillant を Levalljang と勝手な発音で呼んでいるのだろう。
78) Herman Meyer は，この点について Störer における「遠」と「近」のグロテスクな結合を指摘している。Herman Meyer, „Raum und Zeit in Wilhelm Raabes Erzählkunst“ in: „Raabe in nener Sicht“ S. 126.
79) S.67 に見える Stopfkuchen の言葉「『早いこと』ばかりが走る助けになるとはかぎらんのさ，Eduard」の要約的引用。
80) S. 207.

うに思われる。と同時にここには，空間的に遠くまで達した者（Eduard）が精神的には近くに留まり，空間的に近くに留まった者（Stopfkuchen）が精神的には遠くまで達している，という作家の仕組んだ ironische Umkehrung が成立していることも確認しておく必要があろう。

さて，Stopfkuchen の＜liegen＞という存在様式と密接に結び付いている「時間志向性」とは何か。それは，彼の現実認識の深化を暗示する二段階の時間象徴から成り，空間象徴，「食」象徴，肉体象徴等の他の一切の象徴群を，負の象徴から「反時代性」を提起する正のそれへと転換させる，象徴構造全体の鍵を握っているものである。ところで，時間象徴の推移と空間象徴の意味の推移とは直接的に連動しているので，ここでは両者を一括して扱うことにしたい。先に少し触れたように，Stopfkuchen は老 Schwartner によって歴史，とりわけ7年戦争のそれへの目を開かれたが，これが彼の現実認識の深化の第一の階梯を示す時間象徴に他ならない。彼が7年戦争に興味を抱いた直接のきっかけは，Xerver 公の率るフランス・ザクセン連合軍が赤の砦から発射し，今も当時そのままに彼の家の破風に突き刺さっている砲弾であった[81]。砲弾の弾道を遡るようにして彼の興味は赤の砦へと移行し，Tinchen と知り合って赤の砦に出入りするにつれて，赤の砦の視点から近隣を眺めるようになる。ここにおいて7年戦争という時間象徴は，赤の砦という Stopfkuchenと世界との関係を暗示する空間象徴と重なり合う。彼は戦争の歴史を学び，現に赤の砦に立ってそこから世界を眺めることによって，自分を生来の怠け者として疎んじ挑斥し続ける生い育った町＝世界を，初めて攻撃されたものとして発見する。こうして彼は，自分の属している世界と敵対し，自己本来の姿をそのまま打ち出す契機を獲得する。しかしこのことは，世界への埋没からの脱却であり，自己主張の可能性の発見ではあっても，少年 Stopfkuchen が自分を排撃する近隣＝世界を赤の砦から見降しながら「誰憚ることなくぶつぶつ言い悪態をつく」[82]という軽蔑する対象との不毛な敵対性が示しているように，冷静な世界の客観

81) S. 68.
82) S. 111.

化や本来の自己肯定からははるかに程遠いものと言わざるをえない。彼がそのような深められた認識に到達するためには，太古の化石との出合いという，もうひとつの契機が必要であった。これが，彼の現実認識の深化の第二の階梯を示す時間象徴である。

ある日 Quakatz から納屋にあるマンモスの骨を見せられた Stopfkuchen はそれに異常な興味を寄せ，それ以来赤の砦周辺の太古の化石を発掘し復原することが彼の生涯の趣味となった[83]。ところで，彼のこの学究的な趣味の成果は，もっぱら現実認識の深化のレベルの問題として提示される。「過ぎ去った昨日という日を，まるで何千年も地中に埋もれていたマンモスの骨のように掘り起」[84]し，また太古の骨を再構成し逆に現実の骨を磨り潰して土に返す[85]とあるように，彼は途方もない時間的パースペクティヴから現実を認識する視点を獲得している[86]。このことによって彼は，世界との敵対関係を極限的に相対化して克服したばかりではなく，赤の砦から近隣＝世界への眺望の快適さが再三にわたって強調されているように[87]，「心地よい世界軽蔑の高み」[88]に到達し，「あらゆる俗物的な世界観の頭を足で踏みつけにすることができ」[89]たのであった[90]。

こうして Stopfkuchen は，地上的意味で極限的な時間的パースペクティヴに照して時代を相対化することによって，世間＝時代から排撃された「自己」

---

83) S. 99-100.
84) S. 197.
85) 169-170.
86) このことをもっとも雄弁に物語っているのは，S. 180 で真犯人 Störzer の処遇について Stopfkuchen が「大ナマケモノ」の化石に相談を持ちかけている，とあることである。
87) S. 61, S. 100, S. 122.
88) 89) S. 197.
90) ところで，今ひとつの空間象徴にかかわる Stopfkuchen の家の玄関の上に刻まれた銘「方舟から出でよ！」(„Gehe aus dem Kasten“) (S. 75) の意味も，同様の文脈から理解されるべきだろう。S. 96に目立たぬ形で言い換えられているように，ここで言う „Kasten“ とは，実は „Herdenkasten“（「畜群の箱」）のことであり，従ってこの銘は，畜群＝群衆から，つまりは同時代の Philistertum から超え出ることを意味するであろう。

を肯定する契機を獲得する。ところで，彼が自分の理想は自分自身である[91]，という彼の「自己」とは，「肥満」「食いしん坊」等の肉体や「食」にかかわる様々な象徴が示しているように，明らかに sinnlich（「感覚的」）な充足を志向するものである。だが，この「自己」の感覚志向性を明示するこれら諸々の象徴は，同時に「反勤勉」「反生産」「反速度」といった紛れもない「反時代性」の象徴でもある。世間＝時代が彼を排撃し疎んじた理由も，まさにここにあったと考えなければならない。そしてこの「自己」は，太古からする時間の物差しで時代を相対化する以前には，自己肯定を知らない無自覚の「反時代性」の段階に留まっていたが，それ以降は，自己肯定を知る意識的な「反時代性」の域に到達しているように思われる。この「自己」は，「快適さ」[92]と「好悪」[93]にほぼ絶対的な価値基準を置く。またこの「自己」が究極的な境地とする「落ち着いた精神」＝「自足性」も，単に moralisch なものではなく，むしろ，Friedrich 大王の旺盛な食欲と類稀なる落ち着いた精神とが同時に称場され[94]，また肥満＝Breite が「無目的の自足」を暗示している[95]ことからもわかるように，sinnlich な充足を前提とするもの，ないしはそれと類比しうる性質のものなのである。そして Stopfkuchen の基本的な存在様式を示すあの＜liegen＞も，このような積極的な自己肯定に伴って，「遅さ」や「落伍」といった負の象徴から「心地よい安逸」という正のそれへと転換される。同様に「食」にかかわる象徴群についても，彼が昔の単なる「食いしん坊」から「美食家」[96]へと変貌を遂げていることが示しているように，やはり意識的な自己肯定への軌道を見届けることができる。こうして，「勤勉」と「生産」

91) S. 82.
92) これを意味する Gemütlichkeit, Behaglichkeit, Behagen, angenehm 等の言葉もいちいち挙げられないほど頻出する。
93) S. 141 に，農事にいそしむ Stopfkuchen が，生れて初めて „Geschmack“（「趣味」）ばかりではなく „Geschick“（「技能」）をも物にした，とあるのは，逆に彼がそれまでいかに「好悪」のみにまかせて生きてきたかを物語っている。
94) S. 64.
95) S. 74.
96) S. 81.

と「成功」，さらには「倹約」を付け加えてもよいであろう世間＝時代の志向性にとって，「無為」と「食」を楽しみ「肥満」のうちに自足するこの「自己」，あからさまに sinnlich な充足を求めるこの「自己」は，挑発的な「反時代性」以外の何ものでもなかったであろう。

木田元は，「ニーチェ・ベルグソン・マッハという，前世紀末，1880・90年代にその思想的営為の最盛期を迎えた思想家たち」に見られる共通の志向として，「……これまで真に存在する背後世界に対して仮象の世界，現象界として貶められてきた感覚的経験の世界に踏みとどまろうとする決意，認識を真理の把握としてではなく，生物学的機能としてとらえようとする見方[97]」を指摘しているが，Stopfkuchen の「自己」も，その肉体象徴や「食」にかかわる諸々の象徴が示しているように，sinnlich な自己充足，身体的自己充足を生きる営みの本質に据えている点において，この小説と同じ時期に結実しつつあった尖鋭な知性の志向と軌を一にしていることは明らかであろう。とりわけ，これら尖鋭な知性の思想的営みが「ダーウィニズムそのものではないまでも，ダーウィニズムによって励起された進化論を背景として生れた[98]」ことを考える時，Stopfkuchen の生涯にわたる趣味が，当時進化論の立場から盛んに行われた古生物学研究であったこと[99]は，彼我がの連関を考える上で実に暗示的であるように思われる。

しかし，これらの知性が主として人間存在の根本的認識を問題にしていたのに対して，Stopfkuchen の「自己」が，類似した人間認識に立ちながら，Bildungsphilister[100] を含む当時のドイツ社会の広範な Philistertum に対する皮肉と揶揄を込めたアンチ・テーゼという色彩の濃い，その意味でより直接的に社会批判を意図したものであることは確認しておかなければならない。従ってそれは，広い意味で，当時のドイツにおける産業社会化への，ないしは

97) 木田元『身体・感覚・精神』（新岩波講座哲学 9　岩波書店　1986年）25頁。
98) 同上。
99) G. R. テイラー著，矢部・江上・大和訳『生物学の歴史 1』（みすず書房，197年）206～210頁。
100) S. 130～135では，出世の手段に堕した当時の大学が痛烈に揶揄されている。

産業社会へ向ってひた走る時代の風潮へのひとつの反動であり，「産業的・技術的発展によって環境が変革されるにつれて[101]」現われてきた「産業化に反発し，より自然な，より簡素な生活様式と思われるものとの接触を取りもどそうと[102]」（傍点原著）する模索のひとつと言えるかもしれない。しかしまた，それがよし産業社会化への，ないしは産業化を目指す当時の社会に瀰漫していた風潮へのアンチテーゼであるにしろ，「産業社会への反発と「民族（フォルク）」崇拝―汚れない民族的血統の崇拝―[103]」（ルビ原著）とが結合した「信条が極めて広くゆきわたり，世代全体の暗黙の前提として深く定着していた[104]」当時のドイツのもう一方の思潮とは，はっきりと一線を画するものであることも確認しておく必要があろう。むしろ Stopfkuchen の「自己」は，Eduard の生き方や世間＝時代のありようと相対峙してはじめて意味を獲得するいわば限定的なアンチ・テーゼであって，Eduard が Stopfkuchen の言動を再現することによって自らに欠落しているものを見極めようとしているように，時代の通念の上で正当的なもの，支配的なものに隠された負の面を浮かび上がらせるところにこそ，その究極的な意味があると考えられる。

それにしても，Stopfkuchen と相対峙する Eduard や世間＝時代の姿には，単にそこにリアリティーが著しく稀薄であるばかりではなく，どこか正鵠を射損んじているという印象を逸れない。おそらくは，それは世間＝時代が骨格を備えた実体としてではなく，単に騒々しい浮薄な風潮としてしか提示されていないこと，また Eduard の人物の設定が不適切であること，つまり彼が国内で成功した実業家ではなく海外で事業（それも大牧羊業）に成功した男であること等によって，Stopfkuchen のいう存在が提起する時代へのアンチ・テーゼが十分な意味を獲得するに至っていないからであろう。そしてこうしたことの根底には，G. Lukács の言う Raabe の世界観それ自体の曖昧さが横わっているのかもしれない[105]。いずれにしろ，＜Stopfkuchen 対

101）102）James Bysse Joll, "Europe Since 1870-An International History" (Weidenfeld and Nicolson, London, 1973)（池田　清訳『ヨーロッパ100年史１』みすず書房 155頁）

103）104）同上　204頁。

Eduard＞モチーフは，こうして必ずしも鮮明な輪郭を結ぶには至っていないと思われる。

× × ×

以上をもってこの長い論考に一応の終始符を打つことにしたい。この Wilhelm Raabe のまことに難解な小説は，Romano Guardini による再評価[106]以来彼の主著と目されながら，またこれのみを扱ったいくつかのモノグラフがあるにもかかわらず，いまだ十分な解明と評価がなされているとは言い難い。本稿も，所詮小さな一里塚の域を出るものではないが，この小説における視点のあり方と読者との関係を取り上げた点に幾分かの特色があるかもしれない。初回(1)[107]では，この小説には書き手は設定されているが，小説内部の視点を調停するいわゆる Erzähler（語り手）がほぼ不在であって，結局のところこの小説が書き手によって再現されたものであることを論じた。(2)[108]では，この「再現」という性質を裏書きする文体その他の諸現象を取り扱った。(3)[109]では，こうした作者の技巧が読者の関心を故意にあらぬ方へ誘導するカラクリについて論究した。今回の(4)では，見られるごとく，隠蔽された作者の真の意図，小説の真のモチーフを洗い出そうと試みた。だが洗い出されたものの評価，例えば Philister たちのあまりにステロタイプじみたありようや，＜Stopfkuchen 対 Eduard＞モチーフが正鵠を射損んじている恨みがあること等の問題，さらにはそもそもなぜ作者がかかるまでに真意を隠蔽しなければならないのか，また語り手に調停されない対話体小説というものの歴史的意味，等々の問題は，それぞれ別途の検討を要する大問題と言えよう。

（完）

---

105) G. Lukbacs, a. a. O. S. 235, S. 260.
106) Romano Guardini, „Über Wilhelm Raabes ≫Stopfkuchen≪“ 1932, in: Raabe in nener Sicht, S. 12-43.
107) 小樽商科大学『人文研究』第64輯1982年117-139頁。
108) 同上第66輯1983年　45-62頁。
109) 同上第68輯1984　43-69頁。